

編集後記

『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』(AJJ) 第 18 号をお届けいたします。今号には、日本語教育の理論と実践を架橋する、実践報告 2 編、調査報告 4 編、短信 2 編の計 8 編が掲載となりました。

今号掲載の論考は、本研究会の会員の皆様のご関心の広がりを感じさせるものばかりです。日本国内での授業のあり方だけでなく、海外での授業活動に関するご投稿があること、また、日本語学校や大学での学習がテーマのご論考だけでなく、IT 企業での日本語研修における大学教員の役割を問い直すご論考があること、また、調査方法についてのご論考に加え、修士論文執筆にかかる研究活動における執筆作業の内省に関するご論考など、バラエティの豊かさには目を見張るものがあります。これら 8 編の論文は、学習者が置かれた多様な文脈を捉え直し、単なる言語知識の習得を超えた「何ができるようになるか」という行動中心の視点を共有しています。

また、今号には第 67 回定例研究会での会員発表をもとに、さらなる思索を深めて執筆された論文も含まれています。2 月の例会では会員によるご発表の機会を設けていますが、そこで得られたコメントを活用し、さらに検討がなされたうえでご投稿いただいたご論考もあり、本研究会をご活用いただく流れが徐々に出来上がりつつあることも大変嬉しく思います。

本号が、日本語教育に携わる皆様のさらなる研究と実践の糧となることを切に願っております。掲載された 8 編の論文が、読者の皆様の日々の教育実践や研究における新たな対話の種となることを願っております。最後に、査読にご協力いただいた諸先生方、ならびに刊行までにご尽力いただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

(編集委員 T.I.記)

刊行：2026 年 8 月

第 18 号アドバイザー
(五十音順)

* * 石澤徹 (東京外国語大学) ・ * 牛窪隆太 (東洋大学) ・
* 小笠恵美子 (昭和音楽大学) ・ * 数野恵理 (成蹊大学) ・ * 小森万里 (大阪大学) ・

清水慶子（立教大学）・田中信之（富山大学）・＊寅丸真澄（早稲田大学）・
内藤真理子（電気通信大学）・＊藤田裕一郎（朝日大学）・
＊松本明香（帝京大学）・＊宮崎七湖（新潟県立大学）・
山口麻子（テンプル大学ジャパンキャンパス）
（編集委員＊、＊＊は委員長）